



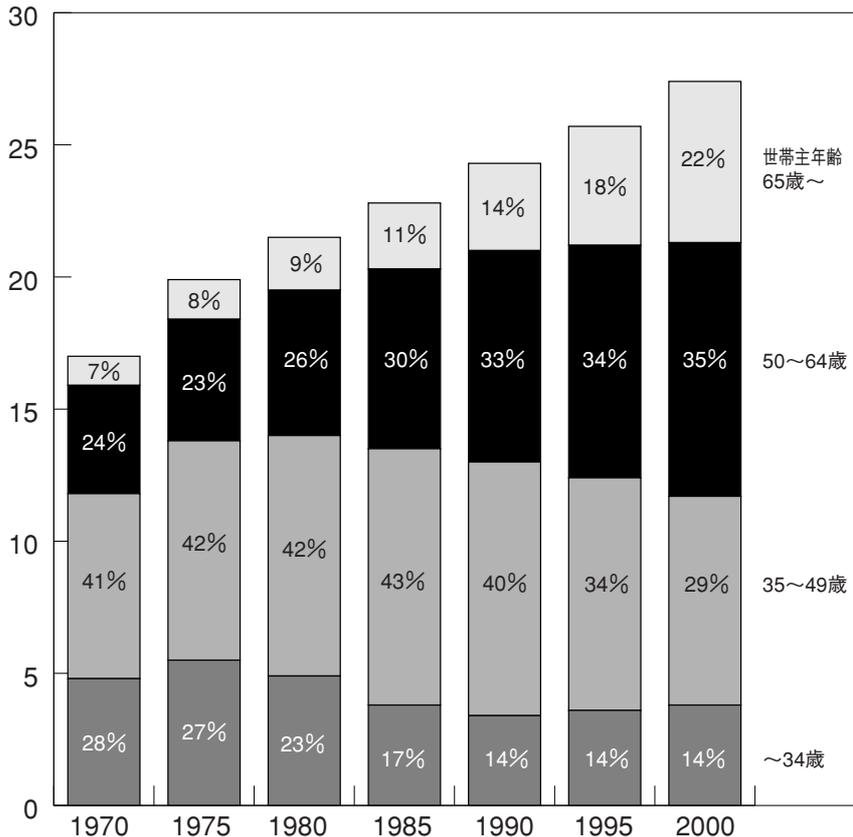
59 2002.9
(株)よかネット

NETWORK

ひともうけ通信13
 個族化社会における“縁・つながり”願望とその探究
 -若い核家族が減って、青壮年の個族化が進んでいる- 2
 古い町並は土地柄・人柄建築群である
 古い建物を残すということ① 5
 「土地柄を生かした産業起こし」が最も関心のあるテーマ
 ~協同組合地域づくり九州アンケート調査より 7
見・聞・食
 大草原の内モンゴル 8
 モンゴルの風が 身体を包む 馬の上
 見霽かす 緑の起伏を 風がなでる 8
 モンゴル相撲に柔道で挑む 10
 大自然と激痛を感じた乗馬体験 10
 ところ変われば色変わる 11
 北京の学研都市、中関村科学技術園区はスプロール化し境界がない 11
 留学生がつくる料理が味わえるランチ店は、
 ボランティア活動の中から生まれた 13
 異次元体験椎葉村 14
 子どもたちへの思いが詰まった場所 16
近況
 伝統は守るのではなく積み上げるもの 18
 盲学校でのハーブガーデンづくりワークショップ 19

●核家族世帯が減っている？（年代別で見る核家族の推移）

(百万世帯)



この見出しは少しオーバーであるが、データ整理の中で核家族世帯の内の世帯主49歳未満層が、1980年以降一貫して減少していることを見つけて驚いた。図でお分かりいただけるように、急速に増加していた核家族世帯が49歳未満では止まり、34歳未満では減少に転じるという風に、世帯の構造は1975年頃に大転換している。1995年には核家族世帯の内、50歳以上層が過半数を占めるに至っている。

私達は核家族というものを「両親と子どもたちのファミリー」としてイメージしがちであるが、現実はそのようではない。多数派は「高齢者の二人暮らし」や「高齢者と成人もしくはそれに近い子ども」の世帯になっている。核家族といえども、「個族化」の一手前であることを示しているのである。

(本文は2ページより)

※値は総核家族世帯数に占める比率

個族化社会における“縁・つながり”願望とその将来

—— 若い核家族が減って、青壮年の個族化が進んでいる ——

糸乗 貞喜

＜アンケートのお願い＞ 私どもは、表記のようなテーマで、NIRA（総合研究開発機構）の研究助成をいただきました。その現状認識部分が今回のレポートです。このような問題意識に立って、“縁・つながり＝ネットワーク”が、人々の日常や地域の中でどんな役割を果たしているのか、どうすれば「つながりの豊かな」暮らしができるのかを、考えていきたいと思っています。そのためのアンケートをお願いします（この号に用紙が二枚入っている）。内容は①ネットワークは要るのかからないのか、②みなさんがどんなネットに包まれておられるのか、というテーマです。アンケート結果の概要は次号に掲載します。

なお、回答をお寄せいただいた方には、アンケート結果の概要のみならず、フリーアンサーの概要もつけて、個別にお送りいたします。なにとぞご協力のほど、よろしく願いいたします。

「個族」という言葉に違和感をもたれると思う。「家族」というと核家族であったり、別の縁戚の人も含めた世帯であったりするが、「独立した家で、ひとつの生計をもと」に暮らす固まりである。最近、一人で家と世帯の独立した生き方の人が増えている。さらに青壮年の同居未婚も増えている。この両者を合わせて「個族」と呼ぶことにした。

●個族化時代のはじまり

「個族」という言葉を、レポートに使い始めたのは1990年頃のことだが、これが一般用語になるとは思っていなかった。1998年の元旦の日経新聞一面のほとんどを使って、「“個族”の時代が始まる」という特集がでたとき、ついに一般用語になったかと思った。個はひとりを指すので個族という言葉は矛盾しているが、現実には家族と同様に一戸の家に住み、一人で独立した生計を営んでいる人たちは、膨大な数に上っている。

1980年代の中頃から「個族」という状況には興味を持っていたが、それは都市近郊の住宅団地の高齢化と一人暮らしの増加であり、過疎地の年寄りの一人暮らしの増加であった。そのときは住宅団地計画に携わっていたので、関心のポイントは、どうしたら住宅地のにぎわいが続き、世代間のつながりが保てて、高齢者の“知恵の受けつぎ”をするシステムの維持ができるかという点であった。

●高齢者の個族化

その後鹿児島島の山村で、生活の残り香があるような多数の空家を見た。聞いてみると、年寄りには都市の子どもの所へ行ったり、そこに馴染めずに帰ってきたりと、かなり移動がはげしいようであった。データで調べると、60才以降の高齢者の移動が、歳をとるに従って増えていることがわかった。（これは1995年に、NIRAの助成研究の中で、「高齢者をとりまく地域のネットワーク化が、不幸な移動を減らす」という提言になっている）

●青壮年の個族化にどう対応するか

近年、「少子高齢化」という言葉があまりにも強くなりすぎていて、個族化の動きが高齢者問題として捉えられているように見える。しかし高齢者については、「介護保険」という形で一応の仕組みが作られた。これで、公的なネットワークによるサポートシステムができたことになった。

しかし、現在急増している青壮年(35～49才)の

図表1 青壮年の単独世帯の増加が著しい（人口に占める単独世帯数の推移：年齢別人口比）

	35歳～39歳			40歳～44歳			45歳～49歳		
	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数
1975	3.3%	2.5%	2.9%	2.7%	3.1%	2.9%	2.9%	4.4%	3.7%
1980	5.0%	2.7%	3.8%	3.9%	2.9%	3.4%	3.8%	4.1%	4.0%
1985	7.3%	2.9%	5.1%	5.9%	3.0%	4.4%	5.4%	3.9%	4.6%
1990	9.2%	3.2%	6.2%	8.0%	3.2%	5.6%	7.5%	4.1%	5.8%
1995	10.6%	3.9%	7.3%	10.1%	3.6%	6.9%	9.9%	4.4%	7.2%
2000	13.1%	5.5%	9.3%	11.2%	4.3%	7.8%	11.7%	4.7%	8.2%

出典：国勢調査

個族化については、あまり目が向けられていないように思う。たとえば、35才～39才の年齢層の人たちの単独世帯は、1975年には2.9%（男3.3%、女2.5%）であった（表1）。それが2000年には9.3%（男13.1%、女5.5%）になっている。40～44才で少し減って7.8%になるが、45～49才で増加に転じる。

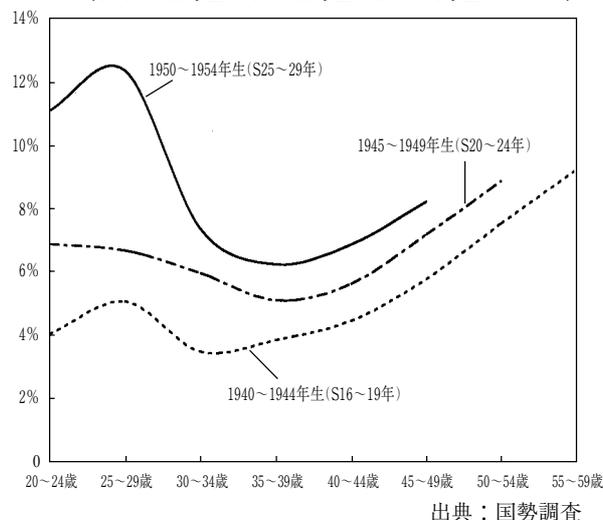
このことを、年齢の推移に合わせてたどってみる（表2）。ベビーブーム(BB)世代は、2000年に50～54才で8.9%（男11.4%、女6.3%）であるが、このBBグループの単身率がもっとも低かったのは35～39才の時(5.1%)である。この傾向はどの年齢層（コホート）にも当てはまる。一般に、加齢に従って一人暮らしが減っていくように考えられやすいが、35才の年代を境にそうではないのである。

●単身ではなく家族等と同居してはいるが、未婚のままの人たちも急増している

初婚年齢が高くなっているといわれているが（1970年－男26.9才、女24.2才、2000年－男28.8才、女27.0才）、未婚の人たちも増えている（表3、4）。2000年には単身でない（世帯の中にいる）青壮年の未婚が、35～39才で12.6%（男15.8%、女9.4%）、40～44才で8.3%などとなっている。この人たちは単身になりやすい状況だとも考えられる。

上記の単身と、この単身になりやすい人たちを合わせて個族と考えると、35～39才で22.0%（男28.9%、女14.9%）となり、個族化率は5分の1を超す。この22.0%の人たちが、5年後に40～44才になった時、どの程度変化しているかが気になる。人口問題研究所の今後の推計を見ても、単身

図表2 出生年代ごとの単独世帯の比率の推移
(1940～44年生、45～49年生、50～54年生グループ)



率、未婚率ともに増加するとされている。

●核家族世帯が減っている？

この見出しは少しオーバーであるが、今回のデータ整理の中で、核家族世帯の内の49才未満層が、1980年以降一貫して減少していることを見つけて驚いた（表紙のグラフ参照）。図でお分かりいただけるように、急速に増加していた核家族世帯が49才未満では止まり、34才未満では減少に転じるという風に、世帯の構造は1975年頃に大転換している。1995年には、核家族世帯の内、50才以上層が過半数を占めるに至っている。

私達は、核家族というものを「両親と子供たちのファミリー」としてイメージしがちであるが、現実はそうではない。多数派は、「高齢者の二人暮らし」や「高齢者と成人もしくはそれに近い子供」の世帯になっている。核家族といえども、「個族化」の一步手前であることを示しているのである。

図表3 初婚年齢が高くなっている
(平均初婚年齢の推移)

	夫	妻
1970年	26.9歳	24.2歳
1975年	27.0歳	24.7歳
1980年	27.8歳	25.2歳
1985年	28.2歳	25.5歳
1990年	28.4歳	25.9歳
1995年	28.5歳	26.3歳
2000年	28.8歳	27.0歳

出典：人口動態統計

図表4 単身ではない未婚者が増えている(2人以上世帯の未婚者数－2000年)
※括弧内は年齢別人口に占める比率

	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64
男	646,473 (15.8)	434,628 (11.1)	350,675 (7.8)	235,219 (4.5)	84,038 (2.0)	38,814 (1.0)
女	378,332 (9.4)	213,082 (5.5)	163,694 (3.7)	144,873 (2.8)	82,046 (1.8)	57,286 (1.4)
総数	1,024,805 (12.6)	647,710 (8.3)	514,369 (5.8)	380,092 (3.6)	166,084 (1.9)	96,100 (1.2)

出典：国勢調査

図表5 青壮年の個族化率が高まっている（単独世帯数＋2人以上世帯の未婚者数）
※括弧内は年齢別人口に占める比率

	35歳～39歳			40歳～44歳			45歳～49歳		
	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数
1980	431,694 (9.4)	275,232 (6.0)	706,926 (7.7)	253,142 (6.1)	223,569 (5.4)	476,711 (5.7)	206,518 (5.1)	262,170 (6.5)	468,688 (5.8)
1985	820,591 (15.2)	375,764 (7.0)	1,196,355 (6.9)	421,848 (9.3)	261,433 (5.7)	683,281 (7.5)	295,576 (7.2)	249,152 (6.0)	544,728 (6.6)
1990	921,789 (20.4)	355,754 (7.9)	1,277,543 (14.2)	754,555 (14.1)	351,901 (6.6)	1,106,456 (10.4)	459,239 (10.2)	291,706 (6.4)	750,945 (8.3)
1995	963,652 (24.4)	410,180 (10.6)	1,373,832 (17.6)	871,221 (19.2)	343,867 (7.7)	1,215,088 (13.5)	812,406 (15.2)	399,823 (7.6)	1,212,229 (11.4)
2000	1,183,733 (28.9)	598,720 (14.9)	1,782,453 (22.0)	875,907 (22.3)	377,912 (9.7)	1,253,819 (16.1)	872,629 (19.5)	373,586 (8.4)	1,246,215 (14.0)

出典：国勢調査

図表6 青壮年核家族が減り、高齢核家族が増えている
（世帯主年齢別核家族世帯数の推移）

	核 家 族 世 帯 数				
	総数	～34歳	35～49歳	50～64歳	65歳～
1970年	17,044,670 (100.0)	4,756,345 (28.0)	7,025,360 (41.0)	4,131,985 (24.0)	1,130,980 (7.0)
1975年	20,040,790 (100.0)	5,504,935 (27.0)	8,385,560 (42.0)	4,613,680 (23.0)	1,536,615 (8.0)
1980年	21,603,551 (100.0)	4,891,770 (23.0)	9,124,113 (42.0)	5,544,675 (26.0)	2,042,993 (9.0)
1985年	22,803,619 (100.0)	3,804,825 (17.0)	9,692,797 (43.0)	6,789,486 (30.0)	2,516,511 (11.0)
1990年	24,218,079 (100.0)	3,363,281 (14.0)	9,601,815 (40.0)	7,967,179 (33.0)	3,285,804 (14.0)
1995年	25,759,709 (100.0)	3,611,323 (14.0)	8,840,445 (34.0)	8,771,864 (34.0)	4,536,077 (18.0)
2000年	27,332,035 (100.0)	3,797,209 (14.0)	7,899,275 (29.0)	9,574,655 (35.0)	6,060,896 (22.0)

出典：国勢調査

●個族化率が高まる中で、“縁・つながり”が減りつつある

30年ほど前に、広域行政や市町村合併についての検討のために、生活圏の広がりの一つとして「婚姻圏」を調べたことがある。その時の印象は、奇妙に「郡」が活きているということであった。律令時代（7世紀）以来の「郡」は、流域や交通と相俟って、生活圏の基礎になっていた。ところが今では、交通はもちろん、流域までも変化し（ダムや流域下水による流域界の越境）、郡は合併で取り残された1～2町村に残る残滓のようになっている。結婚も農村から都市へ出た段階で、あるいは大学へ行ったときから、在来の地縁は消えた。そして婚姻圏などという“つながり”も消えてしまった。

現代は、“縁・つながり”が日々薄くなっていく

時代である。

- ①親戚づきあいは、数も減り、距離も遠くなっている。
- ②兄弟姉妹は、数も減って、住むところも離れている。
- ③会社人間はそれほど評価されなくなって、帰属意識より仕事能力主義になった。
- ④農村集落や街の町内会の加入率も減っている。など、縁づくりにも自己責任が求められている。

以上が現在までにまとめたところです。今後フィールドワークを経て次のようなまとめを行います。それは追って報告いたします。

＜人々は“縁・つながり”なしでは生きられない。新しい縁づくりの試みが増えている＞

（いとりのり さだよし）

古い建物を残すということ①

古い町並みは土地柄・人柄建築群である

小田 好一

今年の5月、福岡県八女市の福島地区が「八女福島重要伝統的建造物群保存地区」（以下、伝建地区）に選定された。全国で61番目の選定となる。同地区には明治以前に建てられた茅葺きの建物をはじめ、白壁土蔵造りなどの町家が立ち並んでいる。伝建地区に選定されると、申請のあった物件に対して緊急度や優先順位の高いものから毎年数軒（地区によって異なる）、修理・修景（※1）行為に対する助成金が支払われ（個人負担を伴うが）民間所有の伝統的建築物（※2）（以下、伝建）で構成される町並みの整備が進められる。

伝建の維持管理費は一般的な（プレハブ等の）家屋に比べて数倍かかると言われている。こうした建造物は、現代の生活様式に合わないと感じる人が多いことから、取り壊して新しく建て替えられてしまう場合が多い。

今後数回に渡って、「古い建物を残すということ」というテーマで全国の様々な事例を見て今後どうしていくことが望ましいのか、どんなことができるのかを考えていきたい。今回は私見も含めて「古い建物を残すということ」に関する考えをまとめたい。

●土地柄・人柄型の建築物や町並みを継承したい

私は、大学院の頃に伝統的な町並み特性に関する研究を行ったことがきっかけで伝統的な建物に興味を持つようになった。大学の学部の頃までは「この建築家のこの作風が好きだ」など新しい建物



白壁土蔵造り（写真①）

にだけ興味を持ち、古い建物など見向きもしなかった。古い建物という視点では興味がなかったが、地域色、お国柄が強く出ている建物には興味があった。沖縄でいうと（沖縄には興味のあるものが多い）名護市庁舎や首里城に隣接する首里小学校などである。

伝建を建てる材料は周辺でとれるものなどを使い、地元の職人が集落の建物の建設を手がけることが多く、結果的によく似た意匠のものが多いようだ。すなわち、伝建は土地柄（地域に根ざした材料・気候に合わせた設計など）・人柄（施主の繁栄ぶりが感じられ、職人の技術の高さ）がにじみ出たものがほとんどである。

八女福島地区の建物の外観についていくつか例をあげると①白壁土蔵造りのものが多い（※3）、②木の部分に弁殻（※4）が塗られているものが多い、③腰壁が青石張りとなっているものがある（※5）、④梁間3間以上の建物は袖下屋が設けられている（※6）などである。

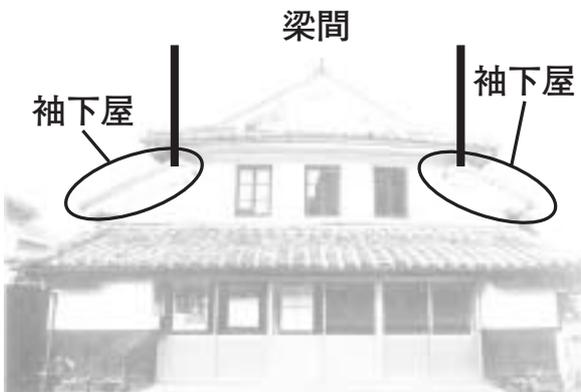
ここで明らかにしておきたいのは、私の考えはただ単に「古いもの」を残そうというのではなく「土地柄・人柄」型建築物や町並みをどうにかして継承していきたいということである。

●八女市の現状

福島（八女市の中心市街地。八女福島伝建地区を含む）周辺の田園地帯では昔から農業、製蠶業などが盛んであったので、築後100年近くになる大きな屋敷が多く点在している。その多くは新しくサッシが入れられているほか、外壁も新しくなっているため、一見伝統的な建物には見えない。しかし、建物の中に入ってみると、欄間、障子など様々な建具に細かい細工が施されており、職人の技術の高さ、建築当時の当主の繁栄ぶりを感じ



青石張り（写真②）



梁間（写真③）

ることができる。建築材についても現在ではほとんど入手できないだろうと思われる大きなものが使用されている。

これら伝建の多くは世帯主が建築者の孫、曾孫の代になっており、生まれた頃から古い建物に住んでいる。この場合多くは、自分の住んでいる家は「伝統があり価値のあるもの」ではなく「古くて住み難いもの」であり、できれば「早く新しい建物に建て替えたい」ものとして考えられていることがほとんどである。また、高齢夫婦、高齢単身で細々と家を守り、息子は帰ってくるあてがないというところ、既に空き家になっているところも多く、建物の荒廃が年々進んでいる。

●なかなか難しい伝建の保存活用

立派な建物が建てられた背景には産業の隆盛等により莫大な財をなした地域があり、施主がいたことが窺える。しかし、立派な建物を残していくには建物を維持管理するだけの財がなければ残らないのが当然である。その費用を行政が負担しているのが全国至る所でみられる。その多くは、かつて民間で所有していたが、維持管理が困難になったことなどを理由に、行政が買収もしくは寄贈を受け、維持管理するものである。

先ほどの八女市の例でいうと、空き家同然となった伝建が多く、保存を考えるならば行政による買収も視野に入れて検討しなければならない。

しかし、行政が所有し管理しているものは、魅力的な活用例が少ないように思う。中にはある特定目的の助成金を使ってしまったために自由度の低い施設になってしまう場合もある。歴史資料館、民俗文化館として整備している例も多いが、リピートしようとは思えない場合がほとんどである。

この場合、訪れるのは、極端な言い方をすると

全国のごくわずかな比率を占める歴史建築ファンと、建物そのものにゆかりのある人のみなのではないかと思う。

地域の歴史・文化を残すという名目があるから採算があわなくてもしかたがないという施設が多いのではないかと思う。

このことを考えると行政負担（持ち主の負担が期待できない場合）で修理のみ実施し、民間による活用ができれば最も理想的である。

さらに少しきつい言い方をすると、地域に古く立派な建物が残っているのは、過去に莫大な財をなした人が多かったこと、一方で高度経済成長期の都市化の波に取り残されたこと、地域産業、家業の衰退などによって建て替えることができなかったこと、また、わずかながら先祖の建てたものを大事にしようとする人がいてくれたこと、日本人の生活が豊かになり「地域文化を残す」というおまけの部分（大事なことだが日常生活の上ではおまけの部分）に目が向いてきたことなど、様々な条件が重なったためであり、これらの条件をクリアしてきた建物は貴重な資源である。

これら貴重な資源を今後どうすべきか、全国の様々な例を調査し「古い建物を残すということ」を考えていきたいと思う。

（おだ こういち）

- （※1）修理・修景：伝統的建造物（塀なども含む）を、履歴調査に基づいて然るべき時代の姿にもどす行為（工事）を「修理」と呼ぶ。戦後以降新しく建てられた建築物などを周囲の歴史的風致と調和するように配慮して増築、改築、新築する行為（工事）を「修景」と呼ぶ。
- （※2）伝統的建築物：ここでは戦前（昭和20年以前に）建てられた建築物を示す。
- （※3）白壁土蔵造り（写真①）：居蔵造り、大壁造りとも呼ぶもので外壁のほとんどが漆喰で塗り込められているもの
- （※4）紅殻（べんがら）：〔インドのベンガル地方で産したことから、「弁柄」とも書く〕赤色顔料の一つ。酸化鉄（III）（ Fe_2O_3 ）を主成分とし、柿渋などをまぜてつくる。木材に塗ると防腐、防虫効果がある。
- （※5）青石張り（写真②）：隣接する広川町で採れる「青石」を腰壁に張ったものが八女地域でよく見られる。
- （※6）梁間3間以上の建物は袖下屋が設けられている：福島地区では梁間（写真③参照）が3間以上のものはつくってはいけないことが取り決められていた。間口が3間を超える場合は（町家は通常間口いっぱい建てられる）袖下屋が設けられていた。

「土地柄を生かした産業起こし」が最も関心のあるテーマ

～協同組合地域づくり九州アンケート調査より～

尾崎 正利

協同組合地域づくり九州では、設立以来、地域の人や資源を生かして自立を図る地域経営の視点に着目してきた。そこで今回、地方の第3セクターや公社、さらには公民館活動や社会福祉協議会などといった地域サービス機関である公的経営体について当該自治体職員がどのように感じているのか調べてみることにした。

調査は協同組合のメンバーで参加希望を募って行うことにし、株式会社ジーコムの新貝耕市氏と当社からの2名で話し合っ進めることにした。

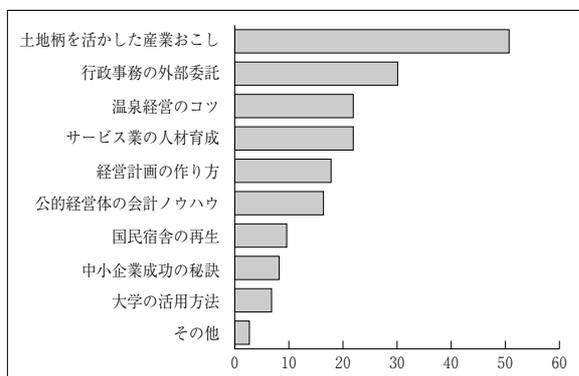
調査対象は、実際に地域の人々と接して活動している自治体職員、地域おこしの活動に関わっている方である。

役場などの組織としての公式意見よりも、回答者に気軽に返事を返していただき、今後一緒に地域問題を考えたり勉強したりする関係づくりになればよいと考え、返信はFAXによってお願いすることにした。そして、回答者には集計結果を再送付することも明記することになった。

●計72通の回答、送付数の1割を超える回答数

7月5日に送付。送付数は九州管内の市町村(沖縄県除く)の企画担当部署あてで計650票。

早いところは送付して3日目、多くは1週間くらいでFAXで返ってきた。中には役場の町長・助役・課長・補佐・係長の回覧印を捺したのち、若手職員が記入したといった感じのところもあった。そして4週間後に数えると実に72票を数えた。



セミナーや研究活動に対して関心あるテーマ

いずれも当該自治体の職員による自らの公的経営体の現状に対する率直な意見である。

●最も関心が高いのは「土地柄を生かした産業起こし」

まだ集計・分析作業が終了していないが特徴的なものだけをいくつか紹介したい。

(持っている事業体)

・回答のあった自治体の約5割は第3セクターを、約4割は公社をもっている。

(事業の種類)

・事業の種類は、土地開発事業、温泉施設運営、物産館などの運営、公園・レジャー施設管理などを行っているものが多い。

(経営状態)

・経営状態については、事業内容ごとに聞いてみたが、良好・まずまずが比較的多い一方で、宿泊施設や温泉施設運営、公園・レジャー施設運営で「芳しくない」に挙げられているものもあった。

(財政的支援の見通し)

・当該自治体から公的経営体に、あるいは国などから当該自治体への財政的支援についての見通しでは、「10年後には減っている」が最も多い。などとなっていた。

最も特徴的であったのは、協同組合の今後のセミナーや研究活動に対して関心のあるテーマとして「土地柄を生かした産業起こし」を5割の自治体が挙げており、さらに「行政事務の外部委託」も3割が挙げていたことである。

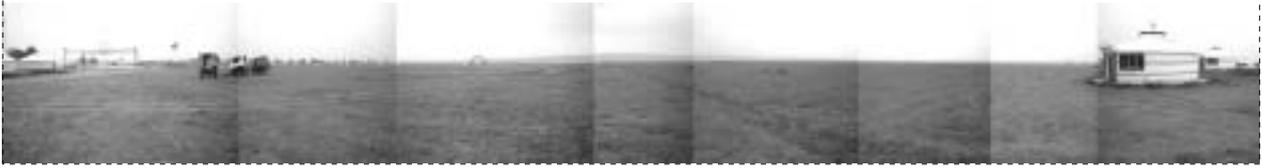
●回答した自治体の多くは離島や山間部。危機感が情報に対して敏感な体質を産んでいるのか。

回答を返していただいた自治体の多くは離島や山間部の自治体で、高齢化と過疎化が並行して進行しつつあるところであった。

とりわけ最も早く返ってきた何カ所かの票は、九州でも最も山深い地域や離島からばかりだった。地域の危機感のようなものがこうした外部からの刺激に敏感なムードへとつながっているのかもしれない。筆跡から見て結構年輩の職員がわざわざ調べて書いて下さったと思われる票も多かった。

今後は集計・分析を急ぐとともに、貴重なご意見をいただいた自治体に結果をお返しして、今後の協同組合の新たなテーマづくりに役立てていきたいと考えている。 (おざき まさとし)

大草原の内モンゴル



中国の内モンゴル自治区へ行って来ました。久留米大学の留学生である阿思根（あしこん）氏との縁がきっかけとなって実現したものです。所員旅行のはずが次第に参加希望者が増え、結局総勢18人で所員以外の人数の方が多かったというツアーでした。

一行は、北京経由で内モンゴル自治区の中心都市呼和浩特（フフホト）へ入り、バスで2時間かけてシラムレン草原へ行きました。草原で様々な体験をし、羊を食べ、パオらしきもの（？）に宿泊しました。ちなみに、パオとゲルは同じ物であり、パオは“包”で中国語、ゲルはモンゴル語です。内モンゴル自治区は中国なので、パオでよいでしょう。

フフホトに戻ってからは、阿氏の親戚の歓迎を受け、その後夜行列車で北京へ向かいました。北京では故宮博物院等の観光班と、北京中関村等の視察班に分かれました。

内モンゴルでそれぞれに体験したこと、感じたことをレポートします。

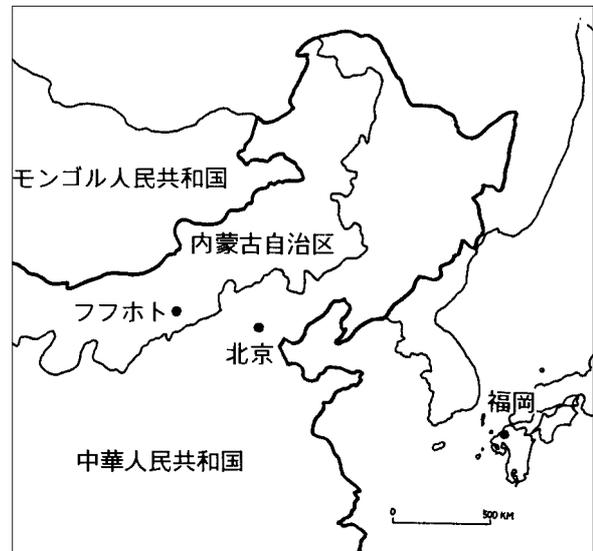
■モンゴルの風が 身体を包む 馬の上

見霽かす 緑の起伏を 風がなでる

<馬上の目線と風>

モンゴルの大草原といっても、そこは水平線のようにでなく、緑の大きなうねりが続く地平線である。この風景を見るのに最も適している目線は、馬上に如くはないと思った。馬という乗り物は、モンゴルに最も適した移動手段である。まず①目線が高いので遠望ができる。聞いた話だが、モンゴルで牧畜をやって生きていくには20キロ先を見分けねばならない。なぜならば、何千頭という羊が混じり合ってしまったら仕分けることはできないのである。かの地の人たちは、40キロ先の人を見分けることができるらしい。②視野が広い。一瞬にして、360度を見渡すことができる。③どんなどころでも通ることができる。④風を感じることができるので、おそらくかの地の人たちは、天候の変化も読んでいるだろう。以上が車より優れている点だと思った。

私たち一行18人は、20代から60代までの男女で、馬の経験者は2、3人ぐらいしかいなかったが、二時間余のトレッキングを楽しんだ。はじめは並足でスタートしたが、しばらくして一頭が駆け出すと、一斉に全頭が跑足（だくあし）になって走った。現地の人が三人ついていてくれたが、馬が疲れて並足ばかり続けていると、鞭を入れた。その気配を知らずにいると、突如として馬が走り出



内モンゴル自治区の位置



モンゴル式の歓迎。衣装を着て、歌を歌いながら白酒（50度くらい）をついでまわる。もちろん飲み干す。

す（といっても跑足）ので、お尻が半分ぐらい鞍からはみ出したりした。

今回の我々は、気候には特別に恵まれていたらしい。「旅人が来て雨が降ったら、その人は神になる」というぐらい、雨は恵みをもたらす。着いた夜にも降ったが、それ以前にも少し降っていたらしく、草原は常になく緑豊かだった。時には耐えられないぐらいの砂嵐もあるかもしれないが、「神になった」我々には、気温といい、風の優しさといい、申し分なかった。

<モンゴル観光と漢族>

現地のガイドから、内モンゴル自治区の首都・フフホトの人口は50万人で、漢族でないのは18万人、内5万人は別の少数民族だという説明を受けた。つまり、モンゴル民族は13万人ということなのだが、説明の仕方が気になった。フフホトも馬に乗ったシラムレン草原も、漢族がリードする社会になっていた。

モンゴル草原の観光は、漢族のビジネスである。漢族がモンゴル衣装を着てサービスする産業であった。

<コンクリートのパオ>

包（パオ）に泊まったのだが、それはコンクリート製であった。最高級価格のツアーだったのか（もちろん日頃から、そういう高級価格を望むグループではないのだが）、一つのパオに二人という割り当てで、そのパオにはベッドが置かれていた。さらにシャワーもあったが、あまり出なかった上に、トイレとシャワールームは水勾配が取ってないので、水たまりが残っていてこまった。コンクリートで囲まれていて、乾きにくいのである。ベッドの寝具も湿っていた。この国では水を流す水路を造るという思考は存在しないに違いない。草原のどこにも水路はなかったし、パオにも本来な



コンクリート製のパオ

ら水勾配はいらなかったのだろう。

おそらく、漢族が、モンゴルのパオという形式と、コンクリートで作るという欧米・漢族の様式をくっつけたに違いないと思ってみている。モンゴルのパオなら、湿気が籠もって困るというようなことは考えられない。コンクリートで建てるなら、三階建てぐらいにして（草原の景観を意識して）、快適なホテルを造ればはるかに安くできたに違いない。また、モンゴル式のパオだったら、あんなジトジトしたベッドにはならないだろう。

極めて不思議な話である。どうしてコンクリートの材料を、運んできたのだろう。壁は相当の厚みがあったから、中はレンガかもしれない。どういう設計協議を経て、こんな建物ができたのか、本当に不思議だ。

もしも、草原の馬上のトレッキングがなかったら、不満が噴出したかもしれない。

<羊の丸焼き>

何度でもいうが、草原の馬上のトレッキングがあまりにも良かったので、今回は食べ物の印象が薄い。しかし羊には堪能したし（丸焼きと塩ゆでを食べた）、地元の方たちの白酒（パイチュウ）による歓迎もすごかった。

<もうひとつのメインイベント>

今回の旅は、阿君というモンゴルからの留学生の手引きで始まったのだが、フフホトの彼の親戚の家にお邪魔して、そこの家庭料理をご馳走になった。まず総勢で市場に買い物に行き、我々が寺院に観光に行っている間に調理していただき、20人近いグループが押し掛けてビール飲み放題、パイチュウ飲み放題だった。料理も果物もみんなすごかった。ニワトリの丸焼きが何匹も出たのに食べきれなかった。残ったものを包んでいただき、北京行きの夜行列車に乗ったのに、それが行



ベッドも備えてあるパオの内部



阿氏の親戚宅での歓迎の食事。お皿の上にもたお皿

方不明になってしまったのは残念だった。

こういう、一般の観光旅行では考えられないオプションもあって、今回の旅は超特級だった。

(糸乗 貞喜)

■モンゴル相撲に柔道で挑む

モンゴルといえばやっぱりモンゴル相撲だろう。現地の方がデモンストレーションを行い、その後観客にも参加しないかと呼びかけがあったので、ここはチャンスと思い、参加を志願した。柔道が通用するのかどうか興味があったからである。

羊の皮といっぱい金具のついた独特の衣装を身につけるのだが、思っていた以上に軽く柔らかいので、動きやすい。それでも肩口までしか袖がないし、襟がないので思うように組み手をとれなかった。相手は、私よりやや小柄な人だったので、力負けはしないですんだ。相撲なので、柔道のように足を飛ばして牽制するようなことはないようである。後ろに倒れないように大股で踏ん張っていたので、両袖をつかみ思い切って内股を払った。そんな技はモンゴル相撲にはないのか、相手はまったく予期していなかったらしく、みごとに宙に舞った。5年以上も試合をしていなかったが、身体は柔道を覚えてくれていたようである。みごとにモンゴル相撲に勝利することができた。

これで観客が一気に盛り上がった。そのまま格好良く退場でできればよかったのだが、モンゴルのプライドに火をつけたのか、脱ごうとした衣装を押しさえられもう一試合しろと押し出された。相手はえらく大柄で太った人である。標高が高い(約1,500m)のと日頃の運動不足がたたわり、足元がふ



内股が決まった瞬間

らふらしていたのだが、観客は盛り上がりっぱなしで、他の日本人旅行客からも興奮気味の声援が飛んでくる。とても止められる雰囲気ではなかった。

2人目は技を警戒してなかなか組ませてもらえないし、太っているので持ち上がらない。最後の方はゼーゼーいいながら試合をしていた。周りからは「写真に写らないから近くにこい」だとか、「馬糞を踏んでいる」だとか言われ、だんだん自分が何をやっているのかわからなくなってしまった。それでも見せ場は作りたと思って大技をしかけたのだが、結局つぶされて負けてしまった。もっと身体を鍛えていれば勝てない相手ではなかっただけにくやしさが残った。試合後、草原にしゃがみこみながら、この夏は少しでもビールを減らして、運動しようと思った。

(本田 正明)

■大自然と激痛を感じた乗馬体験

内モンゴル2日目、乗馬体験をした。早朝雨が降ったので天気は曇りぎみ。乗馬日和だった。今まで乗馬の経験はあったが、係の人が馬の綱を引いてくれるのんびりしたものだった。今回馬に乗ったのは18人に対し、引率の人は3人。馬に乗り全員が乗り終わるまで、放置される。この時点でもかなりの恐怖感がある。こうなったらどうしようもないので馬を信じようと腹をくくった。

いざ出発。「馬が走り出したら手綱を死ぬ気で思いっきり手前に引け」というのが阿さんからのアドバイスだった。早速馬が駆け足になり手綱をぎゅっと引いてみると、すんなり止まった。私の馬は当たりだと思った。何人かは暴れ馬で大変そうだったからだ。馬が駆け足になるとお尻が鞍にあたってすごく痛い。あまりにも痛いので足で立つ



はじめは怖がっていたが颯爽?と乗りこなす

ようにすると足が鐙にあたってこれまた痛い。乗馬の用意（太ってお尻に肉をつけておくこと）をしてきてないからだといわれた。

しばらく乗ると馬の特徴が分かってくる。1頭が走りだすと他の馬も連鎖反応で走り出す。しかしある程度行くとおさまる。しかも道は人間よりも馬の方がよく分かっている。モンゴルでは主人が酔っ払って帰る時、馬の上で寝ていても馬がちゃんと家まで連れて帰るのだという。特徴が分かっただけで、少し安心して乗れるようになり、周りの景色に目をやる余裕も出てきた。どっちを見ても草原ばかり。乗っている間は風を感じるのととても気持ちがいい。

帰り道、ここでは馬1頭1頭の体力の差が出だす。私の馬を含め3頭の馬がペースダウン。前に行く馬とどんどん差が開いていった。しかも私の馬はため息までつく始末。さすがの馬でも2時間はしんどいようだった。

次の日は腰と背中が筋肉痛、足が打ち身、お尻が打撲と、乗馬効果がでていた。

(佐伯 明日香)

■ところ変われば色変わる

内モンゴルでの3日間、現地旅行会社のガイドである張愛明さんも同行してくれた。彼女は、20歳。名前通りとてもかわいらしく、明るい女性である。中学校を卒業した後、専門学校に進学し日本語を勉強して1年になるという。もっと日本語が上手になりたいと、現在の旅行会社に就職したそうだ。

私たちが宿泊したパオ村では、食堂内に併設している売店でおみやげを売っていたが、2日目、夕食まで時間があつたので、周囲にあるお店にも阿さん、張さんとともに行ってみた。店に入ると、

昨晩売店に立っていた女性がその店でも売り子をしている。聞くと、その店もパオ村のオーナーが経営しているとのこと。大半は、売店と同じ商品が売られていたが、そこで黒いガラス玉のブレスレットを発見した。いい色だと思ったので、張さんに「これかわいいと思わない?」と聞くと困った顔をしている。すると、阿さんが「中国と日本では素敵だと思う色の感覚が違うんだよ。」と教えてくれた。確かに張さんに「どれが好き?」と尋ねると赤いブレスレットを指していたし、北京でもお店の人に「何色が好きか?」と尋ねると赤系のキーホルダーを指していた。文化や場所が違えば当たり前のことなのだが、これは私にとって驚きだった。

買い物から帰ってきた後もしばらく張さんと話をしたが、彼女は「日本人は礼儀正しい。日本が大好きだ。」としきりに言っていた。日本の歌を教えるに頼まれて何がよいか迷っていると、先に大好きだという『シャボン玉』の歌を歌ってくれた。こんなに遠いところでも、日本の歌を知っているということにまた驚いてしまった。わからない言葉は、紙に書いて話したがまた一つ知ったととても嬉しそうにしていた。ゆっくりしゃべったのは30分くらいだったが、日本語が上手になりたいという彼女の意欲にふれ、今の自分は思ったことに対して、どれだけの気持ちで向かっているだろうかと振り返る良いきっかけになった。

(愛甲 美帆)

北京の学研都市、中関村化学技術園区は スプロール化し境界が無い

山辺 眞一

モンゴル旅行の最終日、北京に立ち寄り、北京市に誕生した中関村科学技術園区（中国のシリコンバレーと言われている）の見学を行った。案内を知り合いの楊林君（中国社会科学院）に頼もうと思ったが、その期間に彼は日本に行くとのこと、代わりに同僚の盧國學君を紹介してもらった。

当日の朝、フフホトからの列車は、いつもの終着駅北京駅ではなく北京西駅に着いたため、盧君との合流は1時間遅れになった。それでも無事に合流できたのは携帯電話のおかげである。既に中



手前が清華大学の「海竜大廈」、向うに見えるのが北京大学の「太平洋電腦市場大廈」

国では携帯電話を国民の1割以上が所有しているという。合流後朝食を済ませて、中関村のソフト開発企業「鼎天軟件」(Dingtian Software co.ltd)に向かった。北京市の科学技術院が所有するビルに入居している企業で、鼎天集団(四川省成都が発祥)のソフトウェア開発部門の企業である。主に行政事務の合理化や電力・エネルギー関係のシステム開発を行っているらしく、国内でもトップクラスの会社とのこと。この日は土曜日にも関わらず、親切に対応してくれた。社員はこの北京事務所だけで250人、その10%が博士であり、海外留学経験者は2人いるそうだ。オフィスの賃料は、3元/日・㎡、月額にすると80元/月・㎡、日本円で約4千円/月・坪であり、北京の郊外部でありながら、結構高い家賃ではないかと思われる。付近には今も次々とビル建設が進んでいる。

現在、中国ではWTO加盟が決まってから、海外の留学人員(卒業した留学生)の帰国促進を図っており、各地に留学人員創業パークが建設され、世界中の中国留学人員に帰国を呼びかけている(日経BP発行遠藤誉著「中国がシリコンバレーとつながるとき」にその動向が詳しく述べてある)。中関村にも国際孵化器大廈(国際インキュベーション・パーク)のビルが建っており、帰国留学人員だけでなく、地元の起業家によるベンチャーの受け皿が整備されている。

この中関村科学技術園区には数多くの大学、研究機関が集積しており、中国でも有数の頭脳集積地帯となっている。それだけではなく、彼らがベンチャーを起こすための様々な支援制度と同時に、その製品を市場に出すための市場として、北京大学や清華大学が経営する「電腦市場」のビルがあ



海竜大廈の市場内

る。大学が経営する建物であり、上層階にはオフィス、低層階に秋葉原のようなパソコンを中心とする電子・電気製品の市場が開かれている。まだパソコン製品は、学生にとっては価格も高いため、自作のパソコンをつくる需要が旺盛であり、パソコンのパーツが所狭しと陳列されている。売る側と買う側のやりとりは、そうでなくても声が大きいのに、まさに怒鳴り合っているような感じでもある。

この中関村園区一帯には、ベンチャー企業で成功した会社、外国企業、合弁会社などが次々とビル建設をしている。中関村科学技術園区は、最初に計画された北京北西部の北京大学、清華大学を核とした5km²の範囲の科学都市であったものが、いまや北京中心地区を取り巻く三環路によってつながる5つの園区で構成され、さらに新たな園区が追加されるなど、北京中心部を取り巻く一帯のエリアが科学技術、ベンチャーを核とした新興地域を形成しつつある。かつては、荒れた農村地帯と言われていた中関村地域が、いまや中国の頭脳地帯でありベンチャー創出の拠点に生まれ変わっている。次に訪れた時にはさらに変貌しているであろう。

(やまべ しんいち)

留学生が作る料理が味わえるランチ店は、ボランティア活動の中から生まれた

山田 龍雄

留学生が作るランチ店をマネジメントしているのは山代貴代子さんと佐藤まゆみさんという2人の女性である。留学生といっても料理を作っているのは同行してきた奥さんたちであることが多いようだ。ここではややこしいので、留学生が作った料理としておく。

私がこのお店を知ったのは、ふおるつあ（障害者等の生活支援センター。よかネット55号掲載）のNPO法人設立パーティで山代さんにお会いしたことに始まる。式典後の祝賀会で自己紹介も兼ねてお話をしていたときに、山代さんから「近々留学生のランチ店を始めます」ということをお聞きした。面白い活動をしている方であり、是非、始められたきっかけとその思いを聞いてみたいと思っていた。

●留学生が作るランチ店は夜のお店の有効活用

このお店は、西新岩田屋西側の商店街入口から4～5軒目にある。本業はスナック（店名：しゃべくりぐっちょ）であるが、佐藤さんとこのお店のオーナーとが知り合いであったこと、また、オーナーが山代さんたちの志を理解してくれたことなどから、昼間の有効活用となったのである。

店のオープンはこの年の6月初めであり、オープンして1ヶ月半経ったころ、私は取材を兼ねて初めておじゃまさせていただいた。この日はバングラディッシュからの留学生の奥さんが担当で、バングラディッシュの家庭料理を頂いた。料理の中



バングラディッシュの定食（手前が野菜ルティ・後列左チキンカレー・後列右豆サラダ）

身はチキンスープ、野菜ルティ（バングラディッシュ風お好み焼きみたいなもの）、豆サラダ、ライスであった。野菜ルティは米粉をベースに野菜と一緒にフライパンで焼いたもので、韓国のチヂミにも似た味であった。値段は500円とやや安めであり、西新周辺の学生さんも利用できる値段設定にしてあるようだ。

●現在、10カ国近い国の家庭料理を味わえる

このお店では日本人向けに味をアレンジしないで、ありのままの異国の家庭料理、スローフードの伝統の味を味わってもらうことをモットーとしている。現在は、バングラディッシュ、ネパール、パキスタン、中国、ウイグル自治区、ブラジル、インドネシアなど10カ国近い国の料理を提供している。ただし、曜日ごとにどこの国の料理を出すかは決まっておらず、参加者のローテーションでやり繰り返している。どこの国のランチを食べられるかは、行ってからの楽しみとなっている。

メニューによってはどうしても異国の料理を食べられないという人もいるので、留学生が作る料理以外に山代さんが作る和食ももちろんスローフードで用意している。

オープン当初は留学生の料理を2種類出していたのであるが、メニューによっては片方だけ売れて、片方が売れ残ってしまうということが起こり、留学生同士が気まずい思いをしたこともあったらしく、今は和食と留学生の料理の2種類にしている。また、このお店では第1と第3日曜日は本業の夜の店が定休日となっていることから、早めに予約しておく、異国料理、留学生との語らい満載の20名程度のパーティーもできるとのこと。是非、一度利用してみたいと思う。

●8年前に思いついた構想を実現

現在、山代さんは九州大学留学生会館内で留学生に洋裁を教えるボランティア、留学生のために



野菜ルティを作っているバングラディッシュ留学生の奥さん

日用品を提供するリサイクルボランティア、早良区でのレクリエーション研究会、この留学生定食屋と4つのボランティア活動の他に、自宅での洋裁教室、料理教室、最近、太宰府に開店した料理屋の調理指導と3つの生業も行っており、非常にお忙しい方である。パートナーの佐藤さん曰く「彼女は、マグロみたいな人なの」ということで、とにかく動いてないと死んでしまうということらしい。

何故、このランチ店を始められたのかを尋ねると、留学生との交流から生まれた必然性があるのがわかる。それを整理すると概ね次のようなこととなる。

- ・山代さんが留学生に洋裁を教えていると、留学生の方々はよくお礼として美味しい家庭料理をごちそうしてくれる。このような交流の中から留学生の中には日本で外食ができない人がいることを知って驚く。特にイスラム系の方はお祈りを捧げて屠殺された肉しか食べられないため、今までは東京にある専門店からわざわざ取り寄せていた。(最近、九州大学の近くに祈りを捧げた肉を取り扱う店ができたので、東京から取り寄せることはなくなったとのこと)
- ・交流の源として‘食’は有効な手段であり、このことから留学生の作った料理を通じて、日本と外国とのフランクなつき合いができるのではないかと考えた。
- ・留学生は日本に来て、日本語があまりできないうちは外に出る機会が少ない。特に留学生の奥さんたちは家に閉じこもりになるらしい。そこで留学生の方ができるだけ外に出る機会が出来、日本でいろいろな体験を通じ、アルバイトというメリットもあると考えた。

●ボランティアはお金で買えない貴重なものを与えてくれる

いろんなボランティア活動をしてこられた山代さんと話をしていたとき、ふと「この定食屋は全然儲からないけど、お金で買えないものがあるのよ」というようなことを言われた。この後に続く言葉を聞きそびれてしまったが、この山代さんの話を聞いたときに、数年前に読んだ「ボランティアもうひとつの情報社会(岩波新書金子郁容著)」の中の一節を思いだし、そこの部分だけを改めて読み返した。そこには次のようなことが記されて

いた。『ボランティアは、経済性の規定する価値観とは異なる多様な価値を創造する。また、多様で豊かな関係をも創造する』

山代さんたちの活動は、留学生たちが困っている状況、ニーズから生まれたボランティア活動であるが、新たな仕事づくりへとつながっているし、また、いろんな方たちとの対等で豊かなネットワークも築いておられる。会社だけのネットしかもっていない人たちと比べると、山代さんのような自主的な活動をしている人たちは、本当にもうひとつの情報社会、ネットワーク社会の先端を行っているようにも感じられる。

この留学生のランチ店は留学生と日本人との食を通したサロンとなる要素も持っており、いつまでも続いて欲しいものと思う。続けていくためにはやはり多少は儲けていかなければいけないだろうと思うし、さらにファンをつくり、新たな展開を期待したいと思う。(やまだ たつお)

異次元体験椎葉村

～土風緑(ドブロク)シンポジウムに参加する

本田 正明

●本当にとなり3丁(900m)、そこ一里(4km)の村だった

6月27日に宮崎県椎葉村で土風緑シンポジウムなるものが開催された。椎葉村民のためのイベントなのだが、土風緑の会顧問である黒木勝実さんに招待していただき参加することができた。

以前糸乗がよかネットで椎葉村の方々との交流を記事にしたが(NO.55掲載)、その中で紹介していた「山のご馳走メニュー」がとてもおいしそうで、なんとか食べてみたいと思っていた。

村にいったことのある所員から「すごい山奥だぞ」とは聞いていたので、それなりの覚悟をしていたのだが、最初から自分の想像を超えていた。シンポジウムが始まる1時間前に椎葉村の上椎葉に入ったので安心していると、シンポ会場の富士野まで40分かかるのである。また、一泊させていただく那須右人さんの家までどのくらいかかるか聞いたところ「1時間ちょいですかね」と言われた。冗談だと思っていたら本当にそれだけの時間がかかった。



シンポジウムの様子。会場も手づくり。

●シンポのパネリストは椎葉への思いが熱い

シンポジウムの会場は、お屋敷と呼ばれる大きな建物で、柳田国男も泊まったことがあるそうだ。天気があいにくの雨だったのだが、土風緑の会の若手メンバーが夜中の2時までかかって客席用のブルーシートの屋根をつくっていた。

参加者名簿を見ると、名前がほとんど椎葉さんか那須さんなので、地元参加者の多さが目で見てわかった。役場の人々がまったく入っていないイベントらしく、義務感でやるのではなくやりたい人が勝手にやっているところが非常にかっこいいと思った。

パネリストは村外の人を集めているのだが、村と縁があってつながっている人を呼んでいる。旅費が出ていないにもかかわらず、7人中6名という出席率の高さである。それどころか高知から飛び入りで参加したパネリストまでいた。

シンポの内容は、パネリストがいかに椎葉村とのつきあいが深いかという自慢話から始まり、椎葉村をよくするには今後どうしたらいいかということについて議論した。みんな自分の意見をはっ



菜どうふなど椎葉づくしの料理をいただいた

パネリストメンバー

牛島盛光:熊本学園大学名誉教授(熊本)
 原田解:清武町文化会館館長、民謡研究家(宮崎)
 中谷健太郎:前由布院観光協会会長(大分)
 糸乗貞喜:(株)よかネット取締役(福岡)
 芥川仁:写真家(宮崎)
 藤沢郁子:関西学研医療福祉学院講師(奈良)
 元椎葉村立国保病院医師婦人
 椎葉クニ子:焼畑農業実践農家(椎葉)
 椎葉道生:土風緑の会前会長、耕心会前会長(椎葉)

きりという人たちはばかりなので、コーディネーターの思惑どおりには進まなかったのだが、それがかえって白熱した議論になっておもしろかった。ただ、客席にいる地元の方々の意見を聞く時間がなかったのは残念である。

●念願の山のご馳走をいただく。すべてが椎葉産の料理だった。

議論の時間が、13時から17時までの4時間もあったので、後半から早く交流懇親会が始まらないかとうずうずしていた。ようやく交流会の準備が始まると、おばちゃんたちが豆腐、こんにゃく、タケノコ、牛蒡にゼンマイなどの煮物の数々と山菜の天ぷらの数々、和え物、酢の物、漬け物など、ぞくぞくとご馳走を運んでくる。さらにはヤマメの串焼きまで出てくる。どれもが椎葉でとれたものである。それを椎葉の土地で、椎葉の人たちに囲まれながら食べられるのだからこれほどの贅沢はない。どの料理も食べ逃すまいと必死になって食べた。

●400年の文化蓄積が生んだ土地柄・人柄を堪能する

シンポジウムでは、ほんの少しだが椎葉クニ子さんの話も聞くことができた。今回は山菜の話で



ぞくぞくと料理がと運ばれてくる

はなく爛づくりのことだったが、自分の年日（としび）と丑の日は酒とみそを作っではいけないとのこと。その日に作るとうきよやすものになるそう。この話は、地元の人も知らなかったらしく、参加者の多くが必死にメモをとっている姿を見かけた。400年かけてストックされている椎葉情報的一端を垣間見る思いだった。ただ情報のストックはあっても、クニ子さんの話を地元の人も知らなかったように、知恵の受け継ぎはまだまだ進んでいないのではないかと、また村の一軒軒の距離が相当離れているだけに人とのつながりが失われやすいのではないかと、勝手に心配をしていると、村のイベントや集まりがびっしりと書き込んであるカレンダーを見つけた。離れているからこそ、つながりに対する意識は強く、知恵も受け継がれているのかもしれないと考えなおさせられた。

（ほんだ まさあき）

※載せきれなかった写真やお話をHPで公開しますので、興味のある方はそちらもごらんください。

<http://www.yokanet.com/honda/>

子どもたちへの思いが詰まった場所
～NPO法人子どもアシストセンター
「わくわく」
梶原 里香

熊本市にNPOの子育て支援センター（各市町村に1か所ずつ保育所等に設置され、育児支援や子育てサークル・ボランティアの育成・支援等を行う）があるという話を聞きました。いわゆる子育て支援センターとは性格が違うなと思いましたが、多様な活動をしてもらえるのでご紹介します。

●はじめは幼稚園。そしてNPOを運営

お話をうかがったのは、NPO子どもアシストセンター「わくわく」の理事長で北部幼稚園園長の清田明子さんと事務局長の原田あゆみさん。

清田さんは今から23年前に北部幼稚園をつくりました。当時は第2次ベビーブームの子どもたちが幼児期に入り、幼稚園・保育園が足りない実情もあって地域に幼稚園が欲しいという要望が多く、一方では早期教育に走る風潮、夜型の子、自然体験が少ない子、テレビっ子、アレルギーの子等、今を予測したような子ども達の生活破壊が始まり

つつある頃でした。そのような状況をみて子どもを子どもとして受け止め、子ども時代に自然と関わり、心を震わせる感動体験を通して、子どもの心と身体を育てたいという思いから幼稚園をつくられたそうです。

今年4月からは、大人側からの発想だけではなく子ども側から何が求められているのかも大切にしながら、未来に生きる子どもたち・親たちが安心して生活できるような環境づくりを目指す、という趣旨のもとNPO法人子どもアシストセンター「わくわく」を設立されました。「わくわく」では、無認可保育園、障害児の生活支援（療育事業）、子育て広場、キャンプ、子育て相談室等の活動を行ってられます。

●保育者の希望で始まった無認可保育園

無認可保育園「わくわく保育園」は現在園児5名。保育時間は8時～18時までですが、保護者の都合に応じて延長する（7時30分～19時）こともあります。また母親の出産・病気等、緊急時の一時保育も行っています。

幼稚園を始めて2年目、当時の保育者から希望があったことや女性としてプロの意識を持って保育者として長く働くことができるようにということで、幼稚園内に職場保育所をつくることになりました。そのことを知った共働きの保護者の中から、北部幼稚園の保育方針で赤ちゃんを預かってもらいたいという人がでてきたことから、最初は5～6人で無認可保育園としてスタートしました。そのうち、その兄弟の園児たちの幼稚園終了後の延長保育が必要になったため、延長保育も行うようになりました。

幼稚園の延長保育は現在も続けられており、おやつを食べたり、保育園の園児さんと遊んだりし

わくわくの活動の内容

- * 家族のあり方をともに考える
 - ・「わくわくクラブ」（保育園・親子活動・キャンプなど）
- * 障害児の生活支援
 - ・「おひさまクラブ」（障害児通園事業）
- * 子育ての心配ごと・悩み事のご相談
 - ・「子ども相談室」（生活相談・早期療育の出発点など）
- * 子ども文化アシスト活動
 - ・子どもの教育・文化に係わる演劇・映画・学習会の開催
 - ・わくわく講座の開催



わくわく保育園。

ながら、幼稚園終了後から18時までの時間をわくわく保育園で過ごしています。

●幼稚園で統合教育を行った経験から早期療育の必要性を感じる

幼稚園をつくるにあたり清田さんは周辺地域を1件ずつ訪ねてまわり、その中に障害児がいたら幼稚園で受け入れようと決めておられたそうです。そのこともあって幼稚園初年度から障害児の統合教育に取り組み、毎年数名の障害児が通園しています。

幼稚園での統合教育を通して、幼稚園に入園する3歳からでは療育は遅すぎるため、少しでも早い時期から障害の軽減につながる援助をしたかったこと、また障害児を持つお母さんの負担を少しでも減らすことが大切であるということから、6年前に幼稚園の設立主体である学校法人北部学園で「おひさまクラブ」という療育部門の運営を始めました。しかし、個人の善意だけでこのままやっていたはいけないと思ったこと、社会的に弱者に対する制度があまりにも貧困であること、質の高い指導にはお金がかかること等の理由で、療育部門をNPOで行うことにしたそうです。また平成10年から、熊本市より「障害児通園（デイサービス）事業」として委託されています。

「おひさまクラブ」では以下のような内容で療育を行っています。

- ・戸外でよく遊び、手や足の心地よい刺激を感覚の中にとり入れる。その際、子ども同士の関係を豊かにする方法をとることで、子どもたちに遊びの楽しみを膨らませる。
- ・集団の子どもとの関わりの中でその発達を見ることを前提とし、身辺自立を含め生活の中で必要な力を伸ばす指導を母子に対して行う。



保育園園庭で遊ぶ子どもたち

- ・どの子どもも自ら伸びようとする意思があることを尊重し、母親に言葉かけや援助の仕方を教えていく。
- ・子どもの発達状態により個別に発達診断をしたり、母親の時々悩み相談を受ける 等。

また、幼稚園に通っている障害児の家族で個別療育を希望する人に対しては、週2回「おひさまクラブ」での療育を行っているほか、専門講師を招いた音楽療法も行っています。

●地域の子育てを支える活動も

「わくわく」では地域の子育てを支える活動として、「子育て広場・ぶりんちゃん」と小学生を対象にしたキャンプ「わんぱく隊」を行っています。「ぶりんちゃん」は週2回行われており、0歳～6歳までの子どもとその家族が参加できます。NPOになる以前は「子育て広場」として、週1回北部幼稚園の子育て支援事業として行われていました。

現在の参加者は約10組。「自由に遊ぶ」ことを活動の中心に置き、保育園や幼稚園に遊びに行く、水遊びをする、公園で遊ぶ等の活動が行われています。参加している親からは「友達がなくて寂しかったが参加することで友達ができた」「子育ての悩みをいろいろ抱えていたが、他のお母さんの話を聞いてほっとした」「改めて遊びの大切さを知った」等の感想が寄せられているそうです。

「わんぱく隊」は学校週休2日制の開始に伴い、地域の子どもたちの土・日曜日の過ごし方を支えることを目的としています。夏休みに入るまでは日帰りキャンプを行っていましたが、夏休み中は宿泊も入ったキャンプを行っています。

当初参加者を集めるため、北部幼稚園の卒園生を中心に声をかけていたそうですが、卒園生以外からの申し込みや問い合わせも多かったとのこと。

また、今年度は初めてということで「わくわく」で企画を立てていましたが、参加者や保護者から企画の提案が出ていることから、来年度はそういった意見も取り入れながら続けていこうと考えているそうです。

「わんぱく隊」のような幼稚園卒園後の子どもたちを対象とした活動は、幼稚園教諭では対応できなかったけれども、NPOとして活動を始めたことでできるようになったことの1つなんです、とおっしゃっていました。

●気軽になんでも相談できる場所

「子育て相談室」には熊本市内一円から、1歳半児健診・3歳児健診後のフォローや幼稚園教諭の紹介等がきっかけで相談にきておられます。相談内容としては、障害の疑いや言葉の遅れを指摘されたがどうしたらいいのか、今後どう育てていったらいいのか等、子どもの障害に関する相談が多くなっているようです。

お母さんたちにとっては「障害があるかもしれない」といわれ、病院に行く前にちょっと相談できるところがあるというのは非常に心強いのではないかと感じました。相談を受けてから様子を見るために1週間程度「わくわく保育園」で預かってみるといった取り組みもなされているそうです。

今回お2人にお話を聞いていて、子ども達にとって過ごしやすい環境、地域で子どもを育てやすい環境を作ることに重点を置いて活動されているのだということが本当に伝わってきました。

私が取材にうかがった日、プール遊びのために上半身裸になりながら虫取り網を持ってセミを探し回っていたわくわく保育園の子どもたちがとても印象に残っています。(かじはらりか)

伝統は守るのではなく積み上げるもの

～八女福島仏壇の新たな取り組み～

小田 好一

八女市でまちづくりのお手伝いをしている関係で、福島仏壇（八女でつくられている仏壇）の製造、販売、新商品開発に取り組んでいる城後（じょうご）仏壇店の城後氏とお知り合いになる機会があった。「仏壇の話」など購入しない限り、聞く機会がないだろうと思う。今回、地域ゼミで仏壇

の話などをしていただくことになった。以下にその主な内容を示す。

●八女が仏壇の産地になったわけ

- ・八女の仏壇の発祥は江戸時代終わり頃。城後氏の曾祖父が初代仏壇組合長であった。
- ・元々八女には仏壇をつくるための職人がそろっていた。重箱を塗る漆塗り職人、刀のつばをつくっていた職人、また、城下町であったので城の修復などのために彫刻をする人もいた。

●仏壇の産地ごとの特徴

- ・仏壇は産地によって形が違うがいくつかの流れがある。福島仏壇は基本的に京都の影響が一番強い。京都の仏壇はやや控えめの意匠であるが、細かい細工が施されている。値段はいいものになると、小さいものでも最低700～800万円である。八女の場合、京都のものほど高くはなく最低100万円くらいからである。京都の影響を受けているのは八女の他に彦根、川辺（かわなべ・鹿児島県）などがある。
- ・この他、名古屋の仏壇はとてつもなく大きくて華美である。

●八女福島仏壇業界の新たな取り組み

- ・海外からの輸入仏壇との競合が激化することなど、仏壇業界は厳しい状況となっている。このような状況の中、組合の青年部では新しい取り組みを行っている。その中の一つが丸い仏壇である。しかし、木の性質として丸くするとその継ぎ目が割れてくる可能性があるため、補強が必要となり仕上げの部分でコスト高となる課題が残されている。
- ・仏壇の消費者は「仏壇は自分のために買うものではない」と考えている場合が多い。「私だったらこれ（新型商品）でもいいけどおじいちゃんをこんなものに入れたらどうだろうか」と考え、結局普通のものを選ぶ。仏壇はデザインを変えたからといって、みんなが飛びつくようなものではない。伝統の中に培われているものがいろいろあって、一番売れるものはどこか一ヶ所に新鮮味があるものである。
- ・仏壇職人の方たちは多くの場合、様々な意匠・図柄とその金額をすべて決めている。「良いもの」をつくってくれというと「高いもの」をつくらう（高く金額設定している意匠を並べるとする。しかし、良いものと高いものは違う。車に



組合青年部が開発した「丸い仏壇」

例えば、カローラは質が向上したが値段は上がっていない、何が違うかといえば創意工夫の部分であるという話をしている。しかし、なかなか理解してもらえないのが現実である。

●日本製と中国製の違い

・「伝統的工芸品」の表示のある質の高い仏壇は後々の掃除や修理のことまで考えて、何本か釘を抜くと分解できるようにできている。購入後40～50年で1回漆を塗りなおし、その後30～40年で塗りなおし、メンテナンスを繰り返し、百数十年ほど使われることを想定して設計されている。沿道立地型の大手仏壇店ではその多くが中国産を扱っている。先述のように産地によって仏壇の意匠が異なるが、それにも対応するようになってきた。中国の仏壇業者の中には日本の伝統工芸士が現地で技術・意匠を教えているところもあり、よく研究しているので一般的には中国製であることがわからない。

●今後の取り組み

・技術を継承していくことは当然だが、時代に合わせて変化していくことが大切だ。伝統は守るのではなく積み上げるものだと思っているので、自分たちの世代で積み上げられるものは積み上げていく必要がある。単純な作業ではない。現代の住宅事情にあわせて今まで造ったことのないような小さいものを作ることに挑戦するが、品格は下げられないなど、いろいろな制約の中で調整して新商品開発に取り組んでいく。

伝統産業の新商品開発というと、盆提灯なら和紙を使ったスタンド、仏壇なら彫刻、蒔絵、木工など各業界に分かれて新商品開発ができるのではと考えていたが、セミナー中の話にもあったよう

に、これでは伝統産業の継承ではなく業種転換である。そのことを考えると本道を逸れずに、技術、意匠など受け継がれてきたものに自分たちの作りあげたものを積み上げていくことが大切であることがこのセミナーで分かった。八女は伝統産業が数多く残っていてまだまだ奥が深い地域である。今後、また違った伝統産業について新たな取り組みを紹介したい。（おだ こういち）

盲学校でのハーブガーデンづくり ワークショップ

伊藤 聡

目の不自由な盲学校の生徒たちがハーブを楽しめるガーデンを作ろうと、グラウンドワーク福岡のメンバーが福岡盲学校の生徒、先生、そして地域の人たちとワークショップを行った。

このハーブガーデンづくりは、3年前に第1弾を行い（よかネットNo.40 1999.7に掲載）、そのときは広場の一角で地面を掘り起こして直接ハーブを植えたのだが、次の年には車椅子でも利用できるようにと腰の高さの花壇に作り替えた。腰の高さの花壇はレンガや角材を積み重ねて作っているが、一部カラフルなペンキで塗られ、主な場所にはそれぞれ違う色で塗られた目印の杭を打っている。これによって弱視の人でも位置を確認しやすいようにしている。

実は今、英国大使館が日英同盟100周年を記念して、オーク（柏）の苗木を贈る日英グリーン同盟を展開している。グラウンドワークの活動がイギリス発祥という関係もあって、これまでの活動場所となった福岡盲学校にも苗木が1本贈られるこ



模型をさわってレイアウトを考える



アイデアカードを点字でうち、かなをふった

ととなった。これを機会にハーブガーデンを拡張し、オークをシンボルツリーとして、東屋なども造りひとつの公園にしよう、というのが今回の企画である。

ワークショップでは、盲学校の生徒も数名入っており、ガーデンづくりの当事者でもあるので、単にオブザーバーというわけにもいかない。目が見えなくても一緒に議論に参加して、同じ土俵で意見を交換していく必要がある。そのための工夫をしたワークショップであった。

アイデアを出すときにはカードに書いて出すのが最もポピュラーなやり方であるが、「どんなハーブガーデンにしたいか」を考えると、盲学校の生徒たちはカードに点字を打った。その横で先生がカードの空いているところに墨字（すみじ。点字に対してそう呼ぶ）を書き加えて出した。また、その他の人がカードを出すときは、何と書いているかなるべく読みながら出す。最後に出たカードをグルーピングしてもう一度読み上げた。ガーデンの中の全体配置を考えると、スチレンボードを切り抜いた花壇や東屋など簡単な模型を使って、手で位置を確かめて「この辺がいい」などと並べ替えをしながら検討した。

このように、手法に工夫を凝らすことにより、目の不自由さに関係なく対等に議論できる。これこそバリアフリーの精神だろう。そもそも、ワークショップの手法は、知的障害者、十分な教育を受けていない人などを含め、どんな人でも対等に議論に参加できるための方法として活用された、と聞いたことがある。

ワークショップはもう少し続き、秋頃に記念植樹とガーデンづくりとなる予定である。

(いとう さとし)

編集後記

55号で紹介した「地域生活支援センターふおるつあ」がNPO法人として認可され、その記念パーティーに出席しました。スタッフの方と楽しそうに話をしている利用者子どもたち、そしてそれを温かい目で見守っておられる家族の方々。とてもアットホームな雰囲気が見ているこちらにまでひしひしと伝わってきました。ふおるつあで提供しているサービスの他に、今年パソコン教室やレクリエーションも行っておりスタッフの皆さんは本当に忙しそう。でも、楽しんで仕事をされている姿に励まされて帰ってきました。(り)

内モンゴルで草原のパオに泊まったり、馬に乗ったりしに来る観光客の多くは、実はモンゴル人なのだそう。最初は、え？と思ったが、都市部に住む人が来るらしい。遊牧生活をしている人は既に少なくなり、都市生活をしていると馬に乗ることもない。我々の泊まったにセパオは外国人向けで、その周辺にあった本物風のパオテント村は、国内観光客向けということのようだ。同行した留学生の阿さんは「日本人が海に行くのと同じだよ」と言っていたが、どちらかという、歴史観光や農村体験に近いのでは、自分たちのルーツやアイデンティティを感じる観光なのでは、という気がした。結局、地元周辺の住民が観光の大きなターゲットというのは国が変わっても同じなのだろう。(伊)

今回は別紙にてアンケートを添付しています。可能な範囲でご協力をお願いいたします。集計の都合もありますので、できればお早めにご回答いただければ幸いです。

よかネット No.59 2002.9

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

http://www.yokanet.com

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 03-3226-9130

(株)地域計画・名古屋 TEL 052-265-2401